

粗 飼 料 思 考

司 会 に 当 っ て

松 山 龍 男

(北 農 試)

(1) 北海道で、家畜のエサにする粗飼料には次のものがある。①牧草(生草・サイレージ・乾草)

②デントコーン ③ビートパルプ・ビールカス等 ④ワラ ⑤ビートの葉など作物残渣

本州と異なる点は、牧草が圧倒的に多く、特にその牧草を大量に貯蔵することが特徴であろう。その中で最近注目をあびている「圧縮成形乾燥施設」と、乾草生産施設のうちの「ヘイ・タワー」にしほり「飼料価値」にもふれた話し合いが今度の会議であった。これは確かに北海道的といえる内容である。

(2) だが、話題の技術が、本当に北海道的合理性(というものがあれば)を追求しているかどうかは疑わしい。あるいはまだ、その入口でしかタッチしていない問題が多い、ということかも知れないが、会議での一層の進展は、期待したほどではなかったと思う。

問題は2つあった。北海道畜産の未来像において粗飼料への要求を描いてみることに。もうひとつは、施設の持つ今日的役割に対する認識である。

(3) 圧縮成形することと、ヘイ・タワーに貯蔵し利用するという内容は対立している。

① 道内の生産粗飼料を道内で消費するなら、必ずしも圧縮成形(キューブ、ウエハー)という姿を求めなくてもよい。(この点ではベアラ梱包による流通システム開発の余地はある。)圧縮成形が貯蔵・給餌の取扱いでもすぐれていることは、誰しも認めるが、日本の場合、近距離流通でも、そのコストが、まかなわれる程有効であるか疑問である。

② 将来はしかし、圧縮成形に加えて更に一連の施設化が行われ、北海道農業は完全施設化へ大きく傾斜してゆくとするなら、施設は次々と新手の要求を提出し、その需要が関連産業をうるおすだろう。

③ ヘイ・タワーはそこまでの施設ではなさそうだ。が、どう扱おうかはこれからの問題である。商品生産を目指さない自給用施設として考えても、末端商品は経済戦争しているから単純な評価では割切れない。しかし現状から推察すると常温通風の素朴な狙いのもとでは、従来の「田園的」姿ももつつけるだろう。

(4) 吉田先生の「刈りおくれ草はキューブにするネウチが少い」という見事に当然の結論をきくことにより、圧縮成形のネウチのしかるべき方向をなっとくすることができるが、当然の帰結とはいえ、土地利用の高度化には多難な前途があるろう。

(5) 草刈り経営と家畜飼養農家が、草を商品としてはさみ、その売買を通じて社会的につながる関係が現れると、自給農家もその渦中にまきこまれる。やがて草は草であることよりも「家畜がたべる」もの、としてネウチが認められる。

草が「粗飼料」と表現されている「ひとえの衣」を脱ぎすてる時代が来たとしたら、一体どのような新しいメイクアップを求められているのだろうか。その思考を進めるとき「北海道的」という視野は狭いのだろうか。と、今改めて考え直している。

(1974.4)